

令和5年度第2回 北海道中山間地域等直接支払制度検討会（現地調査）

【概要】

士別市

- (1) 日時 令和5年10月17日（火）9:30～10:30
(2) 出席者 検討会5名（岡田様、近藤様、志村様、丸山様、山梨様）
集落協定代表1名、市5名、JA2名、道協議会2名、
上川総合振興局3名、農政部農村設計課5名

[現地調査] 士別市集落（水田・急傾斜地、緩傾斜地）

（集落のほ場にて）

- 集落の代表的な作付けは、米、小麦、大豆、ビート。
- 毎年水路が埋まってしまう。共同取組で、春先に埋まってしまった水路の整備をしている。
- この辺の段々畑は作業が始まると収穫が終わるまで法面の工事ができず、秋に業者が入れなければ次の春になってしまう。冬に工事をすると鉄板など必要となり農家の負担も大きくなってしまう。
- 他の地域ではあるが、H21から国営事業基盤整備事業をR3まで行っている。
- 田整備で800ha、畑整備で24ha行った。もともと0.3～0.5ha（開拓区画）の76枚のほ場を、基本整備で8枚割（4ha）のほ場に整備している。
- 8枚割りより大きいほ場では4枚割りもある。最大のほ場で6.8ha、機械で田の畦畔の草刈り等ができる。

[意見交換会]

（集落協定について）

- 組織の構図は、集落の管理体制は代表者、副代表、幹事までが各地区の代表者となる。代表の数だけ各地区の意見を取りまとめて各地区の意見として上げてくるのが士別集落の管理体制。集落単位のメンバーが一番まとまりやすいこともあり、小地区ができその上で今の体制になった。当初からこの組織体制でやっている。
- 集落が大きくなった場合、どのような状況で運営するのがよいかという一つのモデルになるのかなど考える。色々苦労する点はあると思うが、無事、今後の見通しがあり、後継者も続いてくる状況、この良い雰囲気作りがどこで醸し出され生まれるのかというのは、歴史の中で形成されてきたものであると理解した。
- 中山間の制度が始まり、士別集落ができた頃から中山間地を持っている方々は個人配分を増やすことをずっと思ってきた。第5期に入り、緩傾斜地に個人配分をするような予算にした。中山間地を持っている方たちは、ようやく個人にも配分してくれることになったと評価している。

(大区画化ほ場について)

- 大区画化しているところは良い機械を持っていたり、地域で取組みやすいところである。逆に不利地に対しても労働力をどうしていくか。高齢化で体力がなく、夏場は熱中症の心配、足腰が弱り傾斜地を駆け上がるのは大変である。高齢化と労働力が一番問題である。
- 大区画にすることにより労働生産性が上がるのは間違いないが、その先にあるのは生産性が上がる分、離農者の就業場所を作る必要がある。6次産業化、トマトジュースや酒米を作る等。農村社会全体を考えた場合、士別市人口、農業人口が減少している。生産性を上げれば上げるほど人口減少していくというジレンマがあるかもしれない。農業者がいれば農業関係の資源維持管理はできて、後継者が来てその程度はできるかもしれない。将来を考えた時、人口維持や対策が重要な課題である。

(担い手について)

- 農業者の新規参入を目指す市の取組については、士別市においては地域おこし協力隊という国の制度を使い、農業支援員の募集をしている。現時点で地域おこし協力隊員は2名、羊関係で5名、農畜産で計7名活動している。地域に就農できるよう研修し、今後、新規参入を目指しており農業者を確保していきたい。



(緩傾斜の水田)



(意見交換会)